

～ 本寺の伝説と昔話の編 ～



春になると、  
栗駒山に現れる  
本寺ギツネ



今は昔、一関市蔵美町本寺地区は骨寺村と呼ばれる中尊寺の荘園でした。この荘園跡では、700年前に描かれた絵図の世界ばかりか、今も地元に残る地名や伝説から、ふるさとの懐かしい民話の世界をも感じることが出来ます。

たとえば、遺跡の東の境「鎔懸」通称「白崖」では、キツネにだまされたというお話が、つい最近まで残されていました。

今から300年前、骨寺村に住む佐々木三左衛門さんは、白崖で美しい女性に化けたキツネに声をかけられました。キツネは三左衛門さんをだまして魚を盗ろうとしましたが、反対に捕まって殺され

そうになりました。しかし三左衛門さんが「もう悪さはするな」と言ってキツネの命を助けてあげたので、キツネはお礼に三左衛門さんの四反歩の田んぼに苗を植えてやりました。その年、村は冷害で大凶作だったにもかかわらず、三左衛門さんの田んぼだけはなぜか大豊作だったということです。

長い冬を終え、ようやく本寺にも春がやってくると、そのキツネ、きまって栗駒山頂付近に残雪となつて表れ、本寺の人たちに田植えの時期を知らせてくれる、というなんとも微笑ましいお話です。

\*\*\*\*\*  
遺跡の西の境「山王窟」は、昔、山王の鬼と呼ばれた蝦夷が一族を率いて立て籠もり、坂上田村麻呂との壮絶な戦いで多くの仲間が殺されたと伝えられる場所です。

坂上田村麻呂は大勢の兵を引き連れ、骨寺村まで鬼退治にやってきました。磐井川を越えて逃げよつとした鬼たちは雨のように降り注ぐ矢に討たれ、現在の「鬼地谷起」はその死骸で埋め尽くされた

と伝えられています。

真坂、駒形へとさらに西へ兵を進めた田村麻呂軍、山王の鬼たちによって牛の生首を張りつけたとされる磐「牛首戸」に恐れをなし、山王窟下の「的場」に集まります。やがて窟に立て籠もった鬼たちとの間で必死の攻防戦が繰り広げられました。飛び交う矢は凄まじく、落ちた無数の矢で埋め尽くされた場所は「矢刈」となり、後にそこは「矢櫃」の地名となりました。

その後、山王の鬼たちは殺され、棟梁の首は祭時山に葬られました。仲間を失った鬼たちの哀しみに満ちた声は、去っていく田村麻呂軍の後を追っていつまでも奥深い沢に響き渡ったということです。

\*\*\*\*\*  
このように本寺には、  
伝説以外にも数々の昔話が残っています。  
髑髏、キツネ、鬼・  
彼らの存在は今も我々にロマンと郷愁をかき立ててくれるのです。  
(平成24年5月)



左・山王窟